

生をはじめ京大國史研究室の諸先学にたいしてあらためて感謝の意を表したいと思う。

(A5判 五八二頁・図版三九葉 昭和四十年七月 福井県郷土史懇談会) (福井県立図書館内刊) 頒価二・五〇〇円 送料一五〇円 (河音能平)

酒井忠雄著

時の科学としての歴史学

「個と全体との関係といい、行為を取扱うものとしてとらえて来た歴史学の性格は、更にそれらをむすびつける原理を求めている。個と全体の関係の追究は、哲学者の任務であり、行為は倫理学や行動科学が追究するものだ。それらを、即物的、外在的にとらえるのが、自然科学とすれば、歴史学はそれとちがったところに、真の研究領域がある。

それは、個と全体の関係を、行動でとらえるという『時(とき)の科学』としてとらえなおすことである。」(九四―九五頁) 時とは、むしろ物理的な「時間」ではな

く。行動とは、表現であり、叙述であり、他に働きかけることである。働きかけるからには、その基準を、働きかけ、変更し、かえたかどうかの目標・目的におく。ためということをぬいたいかなる行為も、無効である。そしてこの有効性をはかる手段として、時をもち出すのである。

第一部 時の科学としての歴史学、第二部 時の科学としての歴史学・研究ノート、に分れた本書は、前著『歴史教育の理論と方法』(昭和三六年刊)・『日本史学史ノート』(昭和三八年刊)につづいて、歴史学とは何か、どのようにあらねばならないか、と問いかけ、真正面から迫ろうとしたエッセイ集であり、このような内容をもつ「時の科学」としての歴史学のあり方が提唱される。

著者の歎きを待つまでもなく、近時、歴史書の出版ブームといい、歴史専攻学生の急増といい、歴史の文運はいよいよよさかんであるが、歴史学のあるべき姿は、混迷の度を深めている。およそ学問にとって、そのあるべき姿への反省は常に忘れてはならぬことであるにせよ、今日の歴史学界にあつては、その必要はひととき痛感されるの

である。長年にわたって、歴史学教育から史学史へと真摯な努力をつづけられてきた著者が、いま本書を世に問われたことは、まことに時宜を得たものというべきである。本書によって提示された問題の方向を、今後一層深く体系化されんことを切望する次第である。

(B6版 一五八頁 昭和四〇年五月 大明日堂刊 定価三五〇円) (熱田 公)

山岡桂一著

日本近代思想史に於ける

政治と人間

本書の中心テーマは、近代日本における「政治的主体性」がどのように高まり、これとの関連の上に「人間的主体性」がどう開花してゆくかということであり、その指標として、「国民国家意識」が設定される。明治一〇年代、自由民権運動期に政治的主体性の意識が高まり、この政治的自覚を媒介に近代的な人間性の自覚もめばえる。二〇年代、人間個性の自覚に深まり、これと同時に民族の歴史的個性に対する意識を昂揚せしめ、ここに近代的国民(ブルジョアジ

と) 国家意識の健全な進展がみられる。明治後期、人民大衆による社会的政治的変革意欲が次第に自覚化され、これを媒介に人民大衆の人間性の解放が希求されるにいたる。しかし明治政権の苛酷な抑圧、指導者の思想的立場の弱さによって挫折し、人民大衆の政治的、人間的自覚は、人民的な国民国家意識にまで進展しえずに終った。かかる見通しのもとに、具体的には陸羯南と北村透谷——歴史的・浪漫的な政治的人間の主体性、石川啄木と魚住影雄——自然主義思想との関連において、木下尚江——社会主義思想との関連において、秋水と尚江の非政治的偏向について、がとりあげられさらに明治二〇年代以後の国民国家意識が生み出した二人の史論家、山路愛山と竹越三又がとりあげられる。その方法としては各思想家の思想を一応「積極面と限界面に分別」するが、「この両者は密着し纏結した統一体をなしているものであり、この両者の統一の把握こそが、近代思想史究明でなければならぬ」とされる。たとえば愛山の場合、その数々の史論に流れるのは「平民主義」であり、明治後期の資本と労働の現状も正しく理解し、「人民の味方」であっ

た。しかし彼の階級的出陣から必然的に影響の深かった儒教の前近代的世界観と国家主義的偏向の故に「まぬがれ難い限界」をもち、国家主義と人民主義の統一理論に到達し得ず、ここに「偉大なる歴史家、先覚者の模索と苦悩をみる」とされる。陸羯南以下透谷・啄木など、従来とも多くの研究が積み重ねられてきたが、愛山・三又の二人は、従来史学史・思想史ともに真正面からとりあげられることは少なかった。近時漸くあらためてその史論の覆刻が行なわれているが、いまこの論考を得たことの意味は大きいであろう。著者長年の地道な努力が、近時学術書出版事情の悪化にもかかわらず上梓されたことを喜ぶとともに、今後一層深く体系化されんことを切望する次第である。

(B6版 二〇四頁 昭和三九年四月 東峰出版(株) 定価七〇〇円)(熱田 公)

鏡味完一著

地名学

鏡味氏は昨年亡くなられるまで生涯を地名研究に捧げられた数少ない人の一人であり、

とりわけ地名研究に体系化と科学的処理を企てられたほとんどの唯一の人であった。本書は著者の前著『日本地名学・科学編』(一九五七)及び『同・地図編』(一九五八)に続くものであり、両著刊行後各種の雑誌に発表された論文、及び未発表の遺稿となった論文を、著者の令息鏡味明克氏が編集し、三部作の一つとされたものである。従って本書だけを取り出せば、やや断片的な諸論文の集成という感を受けるが、著者の全体系中での個々の論文の位置づけは、四四九頁、分類総目次によって理解出来る様に配慮がなされている。

内容を順に追えば、まず「A理論編」に於ては、「I地名学の本質と方法」と題して、著者の地名学を地名学の一科として地名地理学と規定し、著者の主要な方法——地形図の集落名を基本的資料としその分布状態の検討を通じて諸理論を組み立てる——の正当性が主張されている。次に「II地名分布の傾向の原則」では、主として地名分布の範囲と分布密度・分布の重心点と地名分布上の東西日本の対立が記されており、「II母音の対応と地名」では、地名における母音対応の可能性、従って方言の発